

## ミシエル・ド・モンテーニユの自由

松尾正路

モンテーニユの「エセエ」の眞價は、彼が偽りなく自己のすべてを語つたことではなく、自己発見の仕方において、自ら目的としてゐたものに到達することができたことである。

「私は存在エントルを描かない。私は推移パサージュを描く」といふ彼の有名な自己描出の根本原則は、自己を語ることの窮極的な困難を示すものであるが、「エセエ」は、事實の描寫ではない。また思想の精密繪畫でもない。いはば、モンテーニユの、偽りなき判断の履歷書である。

「私は對象を固定することができない。對象は、自ら自然の酔ひにまかせ、ふらふらとよろめき歩いてゐる。私はそれを、そのままの瞬間において捉へる。私は、存在を描かない。私は推移を描く……毎日、毎瞬の推移を描く。したがつて、私の歴史はその時間に適合しなければならぬ。私はたゞ運命によつて變るのみならず、時には自分の意志によつて變る。それは、様々な、變轉する出來事や、何れともつかぬ、時には相對立する想像などの、檢分である。私が他の私となり、或は、他の事情と觀點から主題を捉へるためか、私は、その時々、よく矛盾する。けれども、

デマゲスが言つたやうに、それは眞理に對してではない。私は、眞理に逆ふことだけはしないのである。もし私の魂が固定してゐるものならば、あへて試みる必要はない。私は自分を決めてしまふだけである。しかるに、私の魂はつねに、修業中である。」 (三、二二)

かういふモンテーニュの宣言と自負にたいし、後にルウソオが、殆どおなじ言葉と調子をもつて語つてゐるのに注意してみたい。ルウソオは、自己の精神を叙述するにあたり、次のやうに述べてゐる。

「おそらく、そのためには、秩序と方法が必要であらう。しかし私には不可能なことだ。のみならず、私の目的に反する。私の目的は、心情の變化と繼續の狀態を理解するにある。たとへば、物理学者が日々の氣温の變化を測定するやうな仕事を、私自身に試みるのだ。」 (プロムナード)

しかるに、ルウソオの自己測定は、彼自らの感動のなかに没してしまつた。モンテーニュのやうに、世界と自己への誠實と皮肉アイロニーを持たなかつたからであらうと思ふ。世界と自己の變貌の裡に、なほかつ判断の獨立を維持することによつてのみ、「エセエ」は「エセエ」たり得たのである。ルウソオの自己測定は、社会と人間から隔離した絶望的な孤獨をつくりあげたが、モンテーニュの場合、それは、他の對象よりも自己に試みるのが、手段としては最も容易であり、何らかの確實さに達する唯一の場所は自己より他にないといふ、自負に基く。そして、自己は、世界と人間に通ずる最も親しい素材として選ばれてゐる。

「私が描く私の相貌は様々に變り移るが、つねにそのまゝである。なぜかといへば、世界は一つの永遠の動搖にすぎない。萬物はそこに、絶え間なく動いてゐる。大地も、コーカサスの巖も、エジプトのピラミッドもすべて世界の動きと各自それぞれの動きとをもつて、動いてゐる。恒常不變なるものさへ、さらに緩慢な動きに他ならな

したがつて、「エセエ」を貫く懷疑や不可知論の調子にもかゝはらず、モンテーニユの自己は世界に對立するものとしては描かれてゐない。第一卷第五十章、即ち、彼の著述のなかに「エセエ」なる言葉がはじめて現れ、自己の判断を中心とする著述の方向がやうやく明かにされる時、彼は次のやうに言つてゐる。

「判断はどんな主題にたいしても使用される器であり、どんな場所にも姿を現す。それ故、私はこのエセエのなかで、あらゆる機会を利用する。たとへ一つの主題が全く私の理解を越えるにしても、私はそのやうな主題にたいしてさへ、遠方から瀬踏みしながら、判断を試みる。そして、自分の身長にはあまり深すぎるとわかつた場合には、岸から離れない。」

彼が自分の岸にひき返すのは、世界に背を向けるためではない。一層よく判断の足もとに注意するだけのことである。たゞその判断と注意とが、次第に自己の體濫にふさはしい自由な身體を持つに至るのである。自己を遠方に驅り立てようとした最初の嚴しさと、その遠景の魅力にたいしては、たしかに背を向けたが、この向背は、人間が人間を、自己が自己を欺くものにたいしてなされたのである。モンテーニユがモンテーニユにたいし、また世界にたいし、否定者となつたことはない。自己の内に向けられる彼の判断は、その最も親しい場所で自由にあふるまひながら、なほかつ、この自由のために欺かれ、盲となることを怖れてゐた。

「自分の氣分や氣質にあまり強く釘づけされてはならない。吾々の最上の能力は、自己を様々な用途に使役することである。唯一つの生き方にしがみついてゐるのは、たゞさうして居るだけであつて、生きてゐるのではない。最も優れた魂は、變化と柔軟性に最も恵れた魂である。……自己を私流に仕立てることが私の自由であるにしても、やがてそこから脱け出したいと思はないほどすぐれた自己形成の仕方といふものはない。人生は、不同、不規則、多様な運動である。絶えず自己にのみ従ひ、自己の傾向に執着するあまり、そこから外れることも、これを枉げることもで

きないのは、自己の友たる所以ではなく、まして、自己の主人たることではない。それは、自己の奴隷たることである。「(三、三)つまり、モンテーニュの自己は、外から盗み内に蓄積する貪慾な容器ではなく、また、視線を外に向ける自由によつて失ふことを怖れるほど惨めな自己ではない。「吾々は、誰も、吾々が考へる以上に、豊かである。」(三、十二)彼の場合、自己を整へ充たすといふことは、自己が世界とともに整へ充たされるといふことである。

このやうな自己と世界の關係は、次の決定的な短い言葉に言ひ盡されてゐる。「自己の思想と語るほど、人々の精神により、無益な、または有益な業となるものはない。」そして、すぐ後に、「彼らにとつて、生きることは考へることとなり。」(Quibus vivere est cogitare)といふキケロの引用句がある。(三、二)キケロは、モンテーニュが影響を受けるほどには尊敬したことのない古代人であるから、こゝではたゞ引用の意味しか持つてゐないと思ふが、自己探究の滿々たる自信は、この引用句の後に續いてゐる。「されば、自然は、吾々がかくまで長くたづさはることのできるものは他になく、また、吾々がかくまで容易に、常に、没頭し得る行爲は他にない、といふ特權をもつて吾々のこの業を庇護したのである。」

注意すべきことは、自己探究の特權が自然によつて庇護されてゐるといふ思想である。眞の自己は自然に即し、自己は自然に對して開かれてゐるといふ意味である。モンテーニュのモラルと健康の觀念は、このやうな自己形成の裡に在るのであつて、「アリストテレスによれば、神々の營む業であり、神々とともに、吾々の幸福の源泉がそこに在る。」と彼は言つてゐる。この自然觀は、モンテーニュの最後の最も強固な思想の據り所となり、やがて、經驗から實證の精神に移つてゆくものである。彼の場合、かゝる近代性は、その明かな徴候を示す程度に止まつてゐる。しかし、ジイドが、ルウソオよりも「むしろゲエテの異教的慧智にこの信念を結びつけたい。」と言つてゐるのは、正鵠を得たものと思ふ。ルウソオを自然に繋ぐ手段は抽象と感動だけであつて、様々なる人間や社会の現實的な存在、

即ち、モンテーニユの言ふ、「世界の動きと各自それぞれの動きとをもつて動いてゐる」自然の諸々の現實が無視されてゐた。自然の前に居るのは唯一人ルウソオである。したがつて、自然とルウソオの間にこれらの他者が介入し、自己を主張しはじめるやいなや、猜疑と迫害と孤獨の妄想が生れ、ルウソオの自己は、ひたすら彼自身の内に閉ざされる。彼はモンテーニユのやうに、聴く耳を持つてはゐなかつた。

しかるに、「エセエ」が現れるまで、何人がモンテーニユの精神ほど確かな耳を持つたらうか？、彼は最初に古代人の高く烈しく厳しい聲を聴くことに専念したが、それらの聲のなかから、眞に彼自身の魂に調和するものだけを聴き分けるやうになつた。即ち、彼の鋭く用心深い耳は、自己の外と内において、自己を欺くどんな物音をも聴き逃すまいとした。「私は、私自身を、キケロにおいてよりも、私自身において、(entendre) 理解したい」と彼は言ふ。そして、つひに、自己の内に錯雜する音響の怪しさにもかゝらず、彼の精神の音階が何であるかを知るに至るのである。その不變の音階らしく思はれるものが、ソクラテスであつた。

「かくして長い間、私自身の考察に用ひられた注意力によつて、私は、どうにか他人を判断することが出来るやうになつた。」(三、十三)と彼が言ふとき、彼はこの見事な眞理を次のやうな言葉を附加することによつて汚し、かつ曖昧にすべきではなかつたと思ふ。「少年時代から自分の生活を他人の生活のなかに映して考へるやうに馴らした結果、他人を洞察する一つの氣質を持つに至つた。」

なぜかといへば、自己省察は一つの冷酷さであつて、かゝる判断の行使と、それに耐へ得る自己は、モンテーニユが「エセエ」の全巻を通して、やうやく達することができたものである。少年期の敏感な氣質や習性とは別な秩序に屬してゐる。即ち、自己省察は、誤らざる自畫像をつくる無私と勇氣と鋭さによつて、そのまゝ、他者の理解の最上の武器となるのである。それは、時に、皮肉や諧謔や、正面から打おろす太刀風となつて「エセエ」のなかに蒔き散ら

されてゐるものである。それ故、「談話の術」の章のなかで、彼が何気なく「私は、もし一つを選べといはれるならば、耳や舌よりも、むしろ目を失ふことを選ぶであらう」と言ふとき、この言葉は、殆どモンテーニュの全存在を物語つてゐるやうに思はれる。彼は、おそらく、目の次には舌を失ふことを承諾したであらう。耳を持たぬモーラリストといふものは考へられない。モンテーニュは、目による人間の畫家ではなかつた。彼がイタリア旅行中、古代人の造型美術に注意を向けなかつたことは、甚だ當然であるやうに思はれる。彼はまた、「自分が率直に判断されるのを、聴くためには、極めて強い耳を持たねばならぬ」と言ふ。彼が事實このやうな耳を持つてゐたかどうかについては、彼自ら答へてゐる。それを信ずるよりほかに道はない。

「人が私を反駁するとき、私の注意を呼び覚ますが、私の怒を燃やすことはできぬ。」また、「眞理が何人の手のなかに在らうとも、私はそれを歡待し、愛撫する。よろこんでそこに参加する。遠くから眞理が近づいてくるのを見るとき、私は兜を脱ぐ。」しかし、われわれを驚かすのは、判断の機能に關するモンテーニュの見解である。

「判断は私の主たる地位に在る。少くとも、細心の注意をもつて、かくあらむことに努めてゐる。しかしながら、判断は、私の諸々の慾望を、憎しみも、友愛も、即ちまた、私自身に對する友愛も、赴くまゝにまかせてゐる。それらを變質することもなく、また、汚すこともしない。判断は、自ら欲するやうに私の他の諸部分を改善することはできないが、同時にまたそれらのものによつて改悪されることもない。つまり、判断は、それとは別な場所で任務を果してゐる。」

これほど明瞭に、モンテーニュが自己の場所を示したことがあるだらうか？

モンテーニュの孤獨は、この判断の耳を澄すためにほかならない。しかし、自分の聲しか聞えないルウソオの孤獨の耳ではない。

「内に閉ぢ籠る性分の人もあるが、私の生來の氣質は、他者と交通し、自己を表現するのに適してゐる。……私が愛し提唱する孤獨は、主として、私の感情と思想を自己に向けるためのものにすぎない。私の歩みを制限するためではなく、外憂を除き、屈從と強制を斷乎と遮斷することによつて、諸々の慾望や煩ひを制限するためにすぎない。……むしろ孤獨は、眞實のところ、私を外に向つて擴大する。私は、唯一人居る時、一層多く國家や世界について考へがちである。」(三、三)

即ち、モンテーニュの孤獨は、判斷の最良の場所であつて、自己を異質のものから護るためのもではない。「如何なる説も私を驚かさない。如何なる信仰も私を傷つけない。如何に私の信仰に反するものであるにしても。取るに足りぬ氣狂ひじみた思想といへども、人間の精神から生れ出たものとしてふさはしくないものはない。」モンテーニュのこのやうな言廻しに馴れさへすれば、容易に氣づくことであるが、こゝには多分の皮肉がある。すぐこれに續いて、「判斷に斷定の權利を與へない吾々は、多種多様な意見を、ものしづかに、眺めてゐる。そして、判斷は下さないが、好んで耳をかす。」と彼は言つてゐる。一見、懷疑主義ピロニヤンの哲学を説いてゐるやうにしか思はれないが、實は馬鹿者が馬鹿なことを、学者が空ごとを言つてゐるのを聴き分けさへすればよいので、いかにも人間らしく、時には全く無意味とはいへないことさへある、といふ意味である。「判斷は別な場所で任務を果す」ものである。その別な場所は、モンテーニュより他の場所ではない。「諸々の異説は、私を怒らせもしないが、變へることもしない。たゞ私の目を覺し、私を鍛へる。」といふその場所である。そして彼は、この場所から外へは出て行かない。讀書も旅行も、彼の財と生命を脅かす内亂も、膀胱結石の苦痛も、こゝから外へモンテーニュを連れ出すことはできなかつた。いふまでもなく、「變らない」のは、その質を變へないこと、即ち、モンテーニュがモンテーニュたることを考へない意味である。「存在ではなく、推移を描き」ながら、「その原型は、いつの間にか固り、いはば獨りで、或る定

型を持つようになった」ところのモンテーニュである。したがつて、「私は自分の内部を見る。即ち、私はたゞ自分だけを相手とする」と彼が言ふときにも、それは、判断の自由の場所と「眞理を選ぶ能力」を語るものであつて、彼を世界から隔離する思想にはならない。それ故、彼は、すこしも矛盾を感じることなく言ふことができる、「この眞なるものを引き出す能力（私の場合、どの程度であるにせよ）」と、容易に所信をまげない自由な氣質とは、主として私自身に負ふものである。」（二、十七）

かくして、モンテーニュは、革命の信奉者たり得ず、また、いかなる黨派人たることもできなかつた。そして、同時に、彼の自己と判断の自由によつて、當時すでに自ら國際人たる視野に立つことを語つてゐるのである。

「吾々は良き昔を惜しむことはできるが、現代を逃避することはできない」と彼は言ふ。もし彼の言葉を一つの箴言としてこのまゝに止めるならば、こゝから生れるモンテーニュの像は、どのやうな行動人たることも可能である。しかるに、これに續く彼の言葉は、「吾々は、他の法官たちを希望することはできる。しかし、結極は、現代の法官たちに従はなければならぬだらう。」といふにすぎない。これが、彼の判断の第一歩である。その第二歩は、「それにしても、善き法官に従ふよりは、悪しき法官に従ふことに、一層尊敬すべきものがあるかもしれない。」即ち判断は、現實の善し悪しにかゝはらない。むしろ、判断の本來の機能と効果は、悪しき法官に従ふことのなかに、一層著しく發揮されるのである。これは、自由の名の下におこなはれる屈從であり、この屈從から逃れるための皮肉のやうに見える。この種の皮肉は、しばしば、自己と世界を蔽ふペシミスムやシニスムに終る性質のものであるが、モンテーニュの生來の善意と誠實と哲学が、それを許さない。のみならず、彼は、愉しむことと、逃げることを知つてゐる。「求めるものが何であるかは知らないが、何を逃げ避くべきかを知つてゐる。」

「この王國の何處かの片隅に、古く認容された法律の姿が輝いてゐるかぎり、私はそこから動かない。もし不幸に



して、それらが互に相反し、相阻み、その結果二つの黨派を生じ、曖昧かつ困難な選擇を餘儀なくされるならば、私の選ぶ道は、當然、このやうな嵐を逃れ避けることであらう。」(三、九)

かうしてモンテーニユはドアを閉める自分の手のおなじ自由によつて、それを開く、といふよりも、彼はドアの内側に居りながら、同時に、その外側に立つ、モンテーニユを捉へるこの困難は、現代の自由人アンドレ・ジイドの場合と酷似してゐる。ジイドの「モンテーニユ論」は、モンテーニユを語りながら、より多くジイド自身を明かにしてゐる。たゞ注意すべきことは、兩者共に、逃亡がたゞちに出發となり、脱出が進行に變ることである。モンテーニユは、しかしながらジイドよりも多く慣習の重みに讓歩してゐる。

「社会の最良の形態や吾々を統一する一層適切な法規などに關するあの大袈裟な長々しい論議は、たゞ吾々の精神の訓練に適するばかりである。……かくの如き理想國家は、全く別な新しい世界において實現されるであらう。しかし、吾々の目前の世界は、すでに或る慣習において形成された世界である。吾々はそれをピルラやカムスの如く産み出すことはできない。吾々はそれを、如何なる法の手段によつて仕立て直し、並べ變へるにせよ、慣習の折目から外に曲げることはできない。」

「學說ではなく事實において、優れた、最善の國家は、いづれの民族の場合にも、慣習の上に支へられてきた國家である。その形態と利便とは慣習に依存する。吾々は、現在の状態を好まないが、民主的國家において少數者の支配を望み、君主國家において他の政體を求めるのは、悪であり狂氣の沙汰である。」

このやうに、モンテーニユは、明かに一人の傳統主義者である。人間ならびに社会にたいする不信の量と、觀念的ではあるが多分に實證的な意味において、さうである。しかるに、彼が「私は巴里を、巴里それ自身として愛する」といふとき、一切の哲學を捨ててゐる。「私は、巴里をいつくしむ。その疵、その汚みまで愛する。私はたゞこの偉

大な都市によつて、はじめて佛蘭西人である。」

「神よ、巴里を抗争の巷から救ひ給へ！ 全體が結束すれば、あらゆる暴力から護ることができなのだ。……巴里が存する限り、私は終焉の場所を缺かないであらう。巴里によつてこそ他の如何なる場所をも惜しまぬのだ。」

現實の存在にたいしてモンテーニュが、このやうに判断の場所から外に出ることは稀である。おそらく「エセエ」の全巻を通じ、エチエンヌ・ド・ラボエシイと巴里だけではないかと思ふ。さて、巴里を愛し、その巴里によつて佛蘭西人たる光榮と自負を宣したすぐ後に、彼がどんなふうにもドアーを外に開けるかを見よう。

「私はすべての人間を同國人と思ふ。ポーランド人を佛蘭西人と同様に擁く。しかし、それは、國民的な繋りといふものを世界的一般的な繋りの下位に置きながらである。私はあまり故郷の甘さに甘やかされてはゐない。全く新しい、そして自分で得た知己といふものは、近隣の偶然的な、誰にも共通した知己より遙かに高く評價されるべきであると思ふ。吾々が自ら獲得した純粹な友情は、共通の風土や血縁によつて結ばれる友情に優るのが普通である。」

モンテーニュの自己と世界のかういふつながり工合のなかで、第三卷第二章の「各人は各自において、それぞれ人間性の全貌を具へてゐる」といふ言葉は、極めて自然に嵌められてゐるやうに思はれる。この言葉の持つ重要性を誇張すべきではないといふ考へ方は、個人と世界の關係がモンテーニュによつて未だ充分論理的に究明されてゐないといふ點にある。（落合太郎著、「モンテーニュ」）しかし、モンテーニュの優れた言葉は、思想體係の構成に奉仕する論理的な礎石として敷かれてゐる場合よりも、無體係の體係として生きてゐる全體の蓄積の中から流れ出る。「エセエ」が、多過ぎる冗舌と構成の亂雜さにもかゝはらず、藝術家のジェニイ（Genie）によつて救はれてゐるのは、このためである。モンテーニュ自身、そのことをよく知つてゐる。彼が詩人のごとく飛躍することを。「詩は輕やかな、翼ある、神の如き藝術」であり、「所詮、哲学は、詭辯的なる詩であり、」「私は、詩人のやうに飛躍して進むのを

好む」と彼は言つてゐる。

したがつて、各人が人間の全貌を具へてゐるといふ思想も、モンテーニュの全貌において捉へ、それに適切な位置と資格を興へなければならぬ。そしてまた、この思想は、「エセエ」の自然觀に即するものであることに注意したい。モンテーニュにとつて人間は、人間的虚飾から解放された人間、つまり、自然の理に従ふ人間である。それは、少數の哲学者、たとへば、ソクラテスのごとき賢人であり、「文法家、詩人、もしくは法律家」としてのモンテーニュではなく、「たゞのミシエル・ド・モンテーニュ」である。また、「私は、今日、多くの職人達や、多くの農民が、大学の教師達よりも幸福であるのを見た。」といふ庶民である。即ち、この人間は、学者や知識人の知的粉飾を越えて、じてではなく、眞に「充實した生活」を持つ人々と、一般の民衆を通じて結ばれるものであつて、國境の絆を越えてゆく。「私は、すべての人間を同國人と思ふ」とモンテーニュが言ふとき、彼は素直に、やゝ控へ目に、「ソクラテスがさう言つたからではないが、」と前置きしてゐる。しかし、われわれは、この言葉についても、それがモンテーニュの思想の全貌において、どのやうな位置におかれ、どれだけの比重を持つか、といふ正當な考慮を忘れるべきではないと思ふ。

## 二

モンテーニュが、著述の途中から、その目的と意味に氣がついたこと、「エセエ」といふ著述の表題も、この自覺から生れたこと、そして、「エセエ」の眞價は、モンテーニュがこの自覺の下に、彼自身の判断と經驗を語る部分にあること、第一卷時代の殆ど多くの論説は古代人の影響と、當時の教訓的著述の流行のなかで書かれたことなど、すべてこれらのことは、誰よりも「エセエ」自身が明かに語つてゐる。しかも、モンテーニュが到着した場所は、彼が

出發した思想の方向とは、まったく對立してゐるやうに見える。この事實の意味は何であらうか？ それは、存在を描かず推移を描く」といふモンテーニュの宣言に反してはゐないが、「エセエ」の初期におけるモンテーニュは、甚だ稀薄な、むしろ、彼の自己に反してゐるモンテーニュにすぎない、といふ意味だけに終るものだらうか？

まづ、死の恐怖を克服するために正面から立向つたモンテーニュが最後には、死を忘れ、正當に生を享受すべきことを説くモンテーニュに變つてゐる。しかし、死といふ絶對者について語るのを最後まで、止めようとはしてゐない。次に、モンテーニュは、第二卷、「レエモン・スポンの辯護」のなかで、その辯護の目的に反するほど高く宗教を人間の上においてゐる。即ち、神は、人間的尺度をもつて測ることのできない絶對の假定として存在するにすぎない。したがつて、死の場合と異り、最初からこの絶對者に立向ふことはしなかつた。

では、どの方向へ視線を轉じたか？ 彼の目の前に、そして彼自身の裡に、馬鹿々々しいほど明瞭かつ平凡に存在する絶對者がある。この絶對者は、彼だけではなく、萬人の前に、萬人の裡に存在するもので、何人もそこからは逃れることができない。逃れ得たとしても、せいぜい人爲の粉飾をほどこす程度にすぎない。それが、即ち、モンテーニュの自然であつた。自然を住家ときめたモンテーニュは、つひに、そこから一步も外には出なかつた。しかし、自然といへども、モンテーニュの視野と判斷の外に遠く姿を没してゐる。彼が猫と戯んでゐるとき、むしろ彼がその猫にからかはれてゐるのかも知れないのである。猫よりも確實な相手を選ぶとすれば、そこに居るモンテーニュ自身しかないであらう。自然のなかで、自己の責任において、彼が腰かけることのできる唯一の椅子は、モンテーニュといふ一人の人間である。彼はこの椅子を選び、最後までそこに腰かけた。けれども、モンテーニュの自己は、モンテーニュからも逃れる。猫とおなじやうに彼をからかふ。むしろ、モンテーニュが自己に欺かれる過失の度合は、猫との場合よりも深く容易である。そこで、後にパスカルが人間を葦にたとへたときと殆ど同じ思考の方法が採用される。

——私は私を信用することができない。私は移り變る。そのうへ、私はつまらぬ人間である。けれども、そのことを私は他のことよりはよく知つてゐる。そして、それを知ることが私の唯一の仕事である。これは、猫にはできないことだ。——

モンテーニユは、この自己認識によつて、人間ならびに自己の偉大さを證言しようなどとはしなかつた。——私はこんな人間である。それをどうにもしようがないではないか、——といふだけである。そして、自己の「存在を描かず、推移を描く」ことが、最も自然に即した方法であるかぎり、もはや、こゝから逃れ得る他の場所はない。彼がこんなふうな腰かけてゐる椅子は、壞れることのない一つの絶對者である。モンテーニユの自負は、こゝから生れる。こゝから、眞の「エセエ」がはじまる。

「さて、プリニウスの言ふごとく、自己を眞近に觀察するだけの能力さへあれば、自己は誰にとつても良き教材である。したがつて、此處に私が書き著すものは、私の學說ではなく、私自身の研究である。他人に興へる教訓ではなく、私自身のためのものである。私がそれを公表するからといつて、餘り悪く思はないでもらひたい、私に役立つとが、誰か他人にも役立つことがあるかも知れないから。それに、私は自分の教材を使ふだけで、誰のものにも手を觸れはしない。たとへ馬鹿なことをしたとしても、私が私の損失においてするのであつて、他人の御厄介にはならない。それは、私個人の裡に終つてしまふ狂氣の類で、後に尾をひくものではない。」

このやうに、甚だ謙讓な調子で書かれてゐるが、實は、自負心の裏返しである。すぐこれに續いてモンテーニユは言ふ、

「吾々は、かういふ道を拓いた古人が、二、三人はゐたことを聞いてゐる。それにしても、私と同じ仕方であつたかどうかはわからない。名前を知つてゐるだけである。たゞその後何人も彼らの足跡を踏む者はなかつた。」(二、三)

それ故、モンテーニュは、他の場所（二、八）で、「これは、世界に類を知らぬ唯一つの書物である。」とさへ言つてゐる。かくして、最初は捨身の謙譲らしく見えたものが、「エセエ」の歩みにつれて、次第に充實した確信にむかつてゆく。つまり、自己が絶対だからではなく、自己を絶対者として手中におさめるのである。

死の絶対から生のそれに、宗教の絶対から自然のそれに、そしてこれら諸々の絶対者は、モンテーニュの自己の絶対発見のために等しく貢献してゐる。この観点からすれば、「エセエ」の最初の部分、即ち、モンテーニュが未だ自己を語りはじめない部分を、その理由によつて、不當に軽く評價すべきではないと思ふ。雑文の類は、いふまでもなく、問題の外にある。

「エセエ」とは、モンテーニュの場合、餘分な皮を次ぎ次ぎに剝いで自己の自由に近づいてゆく思想の旅である。強ひて言へば、モンテーニュの絶対の探究である。彼の有名な、*Que sais-je?*（われ何を知るや？）は、懷疑主義または不可知論の表現としてよりも、むしろ、彼が行き着いた絶対のポーズである。「おゝ、無知と無關心こそは健全なる頭脳が休息する何と柔かな快よい、そして健康な枕であるよ！」と言ふときもおなじである。

モンテーニュの中庸や節度の思想は、この絶対の場所に住む精神の自由選擇にほかならない。この自由に到着するまで彼が歩いた道を、その曲り角や折返の工合を、もうすこし詳しく調べてみたい。

まづ、次の言葉は第一巻第三章に出てゐるもので、第三巻ではないことに注意する必要がある。

「この偉大な教訓は、しばしば、プラトンの著述に現れてゐる。即ち、——汝の分を盡せ、而して、汝自身を知れ。——と。……自己の分を盡さうとする者は、まづ第一の課題として、自分が何者であるかを知り、何が自分に最も適してゐるかを知らねばならぬ。自分を知る者は、他人の事を自分の事と間違へたりはしない。何よりもまづ自己を敬愛し、耕す。無用なかゝはりを拒け、無益な思想や詮議を避ける。狂愚は、その慾望に満足することを知らない

が、智慧は、現在に足ることを知り、己れを歎かぬ。エピキュルスは、その哲人をして未來への見透しや顧慮のために勞することを逸れしめた。」

これがモンテーニユの出發である。彼はこの出發と異つたどんな場所に到着したか？ この宣言を第三卷の末尾に置いたとしても、「エセエ」の目的と内容に完全に合致してゐる。モンテーニユは最初から少しも變つてはゐない。變つてゐるのは、時計の針を合せるやうに、モンテーニユがこの宣言にたいして、一層確實なモンテーニユに自分を合せることだけである。彼の脱皮、彼の變節、彼の「推移」とは、このことに他ならない。たとへば、第一卷第二章、「悲哀について」の冒頭に、「私は、悲哀のパシオンから最も遠い人間の一人である。私はこの感情を好まず、尊敬もしない。」と言つてゐるが、この宣言も、モンテーニユの氣質と哲学と生活態度を貫いて變らぬものである。變るのは、この章ではそれが甚だストイックな、精神の力や美として扱はれてゐるのにたいし、やがて、それが生を享受する自然な精神状態へと移つてゆくことである。このやうな變化と推移が最も明瞭な形で現れてゐるのが死の問題である。

モンテーニユは、「汝の分を盡し汝自身を知る」ための最強の敵者として「死」を選んだ。この絶對者たる死の問題が解決されないかぎり、モンテーニユの自己の分は盡されぬものとしたのである。

「吾々の人生は死後においてのみ判斷さるべきである」といふ第一卷第十八章は、死が生最後の審判者であるといふ見解を現したもので、「私は他人の一生について判斷する場、その人が如何に最後を處したかに注意する。そして、私の生涯の主要な研究題目は、終りを完うすること、即ち、靜かに、從容と死につくことである。」したがつて次に來る「哲学とは死を学ぶことなり」と題する章は、前章の解説にすぎない。生の幸福が死の解決によつてのみ得られる以上、「徳の最大の恩惠は、吾々が死を怖れぬことにある」と言つた後に、モンテーニユは極めて重要な言葉

を吐いてゐる。

「死の思索は、自由の思索である。死を学んだ者は、屈従を忘れ去つた者である。」

やがて、死の思索が正面の不斷の課題でなくなる時にも、自由の思索と屈従の逃避とは最後まで続くのである。死の絶對者は、しばしば、運命といふ豫期せざる偶然や不可抗力に姿を變へ、モンテーニュの生活の途上に立ちふさがる、いはば、絶對の使者どもであるが、こゝでは未だ柔軟戦法を採用せず、「故に吾々は、勇ましく踏み止まつて、死と闘ふことを学ばねばならぬ。」と言つてゐる。その正攻法は、死の不意打にも驚かぬやうに、絶えず死を念頭に置き、死を踏みならし、日常化することである。死の想像がもたらす刺痛は避けがたいが「それを噛みしめ繰返しながら、馴らしてしまふのである」

これが死にたいする唯一の準備であると彼は考へた。この準備さへあれば、「死は、私がキヤベツでも植ゑてゐる時に、死のことなど忘れてゐる時に、ひよつくりやつて來るがよい」

死に關するかぎり、モンテーニュは後になつても、この通りにするだけである。死を考へてゐる時間よりも、忘れてゐる時間を多くするにすぎない。すくなくとも、それが最も賢明で自然であると説くやうに變つてゐるにすぎない。死の觀念だけは、しかし、依然として、最後までモンテーニュにつきまといつてゐる。

次に彼は、死に備へる態度から、死を自己の意志に屈伏させようといふ積極的な自由に進む。死を迎へるのではなく、自ら死を選ぶこと、即ち、この怖るべき絶對者を自己の意志の完全な支配下におくことほどの精神の美と力に優るものはないからである。この自由に優る自由はないからである。

「最も意志的な死こそ、最も美しき死である。生は他人の意志にかゝはりを持つ。死は、吾らの意志による」  
したがつて、「賢人は、生きねばならぬだけ生きる。生き得るだけ生きるのではない。」(二、三)



しかるに、ひたすら果敢な意志の實踐として説かれるこの自殺讚美のストインズムは、間もなく、生に等しき死の享受といふ多分にエピキュリアンの調子に移つてゐるのを見る。彼はカトンの自殺について、次のやうに語る。

「私は、カトンが自ら腸をひき裂いて死ぬ様子を思ひ浮べるとき、たゞ彼が混亂恐怖の状態から逸れてゐたのみ信ずるわけにはゆかない。また、彼が、ストワ学派の規則が要求する態度にならつて、泰然動するところなく己を持したとのみ信ずることはできない。この人物の徳のなかには、たゞそれだけの解釋に止まるためには、餘りに多くの快活と元氣があふれてゐたと思ふ。私は、彼が、かくまで高貴な行動のなかに、喜びと悦樂を感じてゐたにちがひないと思ふ。おそらく彼は、その時、生涯の他のいづれの時よりも、愉しかつたであらう。」

「すべて死は、その生と同様でなければならぬ。吾々は、死ぬために別人になるといふことはない。私は、つねに、死を生によつて解釋する。」

こゝでは、すでに、重點が死から生に移つてゐるやうにみえる。よく生きることはよく死ぬことにあるのではなく、よく生きる者だけが、よく死ぬのである。かつて、「最もよく死せる死こそ、最も健康な死である」と言つたモンテ・ニユは、むしろ、最もよく生ける生のみ、最も健康である、と言はなければならなくなつてゐる。

しかし、ストインズムとエピキュリスムが、自己の幸福と獨立の爲に共通した精神目的を内包してゐるやうに、自己の鍛錬が殆ど精神の趣味となつてゐるモンテ・ニユにあつては、たとへ後に彼自らストインズムへの反逆を示したにせよ、この精神の傾向はどこかでつねに、モンテ・ニユの裡に目を覺してゐる。なぜかといへば、彼の自己鍛錬は他と自己とに欺かれぬ不慮の注意と工夫であつて、死の克服に向つた彼のストインズムも、結極は、死が被つてゐる恐怖のマスク、即ち死それ自體ではなく、己れ自身が死の頭に被してゐる想像のマスクを、自分の力で剝ぎ取らうとしたにすぎない。それ故、第一卷第十九章、「哲学とは、死を学ぶことなり」の終りに述べてゐる數行は、同時に、

「エセエ」の終りにまで通ずるモンテーニュの眞理となつてゐる。

「吾々は、人間と同様、事物からもマスクを剥ぎ取らねばならぬ。剥ぎ取つてしまへば、下僕やたゞの女中どもが怖れずに通つて行つたあの同じ死があるだけである。」

モンテーニュが「エセエ」の最後に語つてゐる死の問題は、實に、「下僕やたゞの女中ども」が素直に受け取つてゆく死であつて、それがたゞソクラテスや自然觀に結びつきながら、一層よくモンテーニュの實質となつてゐるにすぎない。彼はこの宣言に自分を合せてゆきさへすればよい。死を直視するだけの勇氣がないために勇しく死を選ぶ自殺などには欺かれまいとする。それは死を「嚙まず、鵜呑みにした」だけのことである。とはいへ、それが人間の常であるばかりでなく、吾々の精神は、重すぎる荷物を肉體に背負はせる。これは、自然の均衡を破る病氣である。精神のマスクをとれ、吾々の肉眼に映るものは、生の現實だけである。モンテーニュのストイシスムへの反逆は、かうして始るのである。

「すべてこれらの尤もらしい手のこんだ言葉使ひは、たゞ説教に役だつばかりである。それは、吾々の背に荷負ひを背負はせたまふ、あの世に送るための演説である。人生は、物質的なそして肉體的な、運動である。本質において不完全な、不規則な活動である。私は、このやうな人生に自分を合せながら仕へる。」

「その頂天に誰も坐ることができないやうな高い哲学といふものは、そもそも何の役に立つのか。吾々の使用と力量を越えた諸々の規則といふものが何の役に立つのか。」（三、九）

「私は、それ故、人間の喜びを妨げる理性、生を勞する過大な計畫、また、尤もらしい学説など、たとへ幾分の眞理があるにしても、認容しようとは思はぬ。それが理性であるならば、理性はあまりに高く不便なものである」  
かうしてモンテーニュは最大の恩人の一人であつたセネカまでも槍玉にあげる。

「セネカが死に備へるために支拂つた努力、不動心を築くための悲愴な汗、そのために、あれほど長い間、もがき闘つたのを見ると、私は彼の評判をぐらつかせてみたいと思ふ。たとへ彼が死に臨んで、確乎とその評判を維持することができたとはいへ。」(三、十二)

もはや、モンテーニユにとつては、死の事にかゝはつて生を亂すほど重大な損失はなく、「たつた十五分間の苦しみのために、ことごとしい格言などはいらない」のである。「死は生の末端ではあるが、目標ではない。その終極ではあるが、決して、その目的ではない」からである。そして、生の最高の師は自然である。哲学や文学ではない。文学は「精神の熱病的過度である。精神を混亂に導く道具である。自己の裡に沈思せよ。死に對して爲すべき眞の論理は自然が教へるであらう。そしてそれは、人生の大事に役立つために最もふさはしい論理である。それこそ、一人の百姓や、また、すべての民衆が、哲学者と同様、事もなげに死んでゆく論理である。」(三、十二)

これで、死のマスクを剥ぎ取ることは終つたのである。ついでに学問や文学のマスクまで剥いでゐるが、モンテーニユが巧妙に聖書の言葉を引用するのは、かういふ時である。「主ハ智者等ノ思想ノ徒ラナルヲ知り給フ」(三、九)しかも、この引用は後に、「エセエ」の増訂の際、用心深く書き入れたものである。同様に、第三卷第十二章においても、少しばかりキリスト教的な精神の貧しさと清貧に觸れながら、「吾々が幸福に過すためには、学問は殆ど不必要である。」と言つてゐる。しかるに、モンテーニユが、「レエモンスポンの辯護」を中心として、いかに人間理性の脆弱さと学問の虚飾を説いたにせよ、また、いかに自己への注視を怠らず、自己への不信をさへ甚だ大膽に表明したにせよ、彼はつひに、自己が坐つてゐるその場所から動いたことはない。モンテーニユは、彼の自己の席を、他の何ものにも譲つてはゐない。それは、彼が腰かけてゐる判断の廻轉椅子である。しかも、モンテーニユの思想と身體に温まつた椅子である。パスカルが狙つたモンテーニユの急所はこの椅子に他ならない。彼はパスカルのやうに「自

己は厭ふべきもの」として己れを取扱つてはゐない。殆どパスカルと同じ調子と描寫をもつて、測り難い宇宙の廣大と神秘と人間の惨めさを説きながら、虚無の深淵にまで、人間をも、自己をも、突き落してはゐない。ラ・ロシュフコオの「マクシム」にたいし、ポール・ロワイヤルの修道士が、「キリスト教は、貴下の哲学が終る所から始る」と言つてゐるほど、人間のエゴを厭ふべき自己愛の樞軸とは考へてゐない。

「古代の人達が人間一般について抱いてゐた様々な思想のなかで、私が最もひきつけられ、最も執着する哲学は、最も人間を輕蔑し、卑しみ、踏み砕くところの思想である。哲学は、人間の傲慢と虚榮とをくじき、また、人間の不決斷と無力と無智とを素直に認容するときほど美しいことはない。」(二、十七)かういふモンテーニュは、そしてまた「文学は精神の熱病的過度である」と言つたモンテーニュは、おなじ章のなかで「私は限りなく詩を愛する」と言つてゐる。第二卷第十四章は一頁にも足りない短文であるが、彼はそのなかで、「不確實ホド確實ナルモノナシ。人間ホド悲惨ニシテ堂々タルモノナシ。」(關根秀雄氏譯)といふブリニウスの言葉を引用してゐる。これほどよくモンテーニュとパスカルの訣別を語るものはなく、また、これほどよくモンテーニュ自身を語つてゐる言葉はないやうに思はれる。

さて、このやうに人間を、それ以上でもそれ以下でもない位置におくことによつて、即ち、人間が人間自身に被せてゐた様々なマスクを剝ぐことによつて、それとはなしに、しかし、論理の内側と實質においては甚だ明瞭に、宗教の假面マスクをも剝いでゐるのである。それは、ちやうど、自己の裡に生ずる想像のマスクを剝ぐことによつて、死の恐怖のマスクを剝がした仕方に似てゐる。

モンテーニュに残されたことは、自然にまかせることだけである。しかるに、自然にまかせるとは、モンテーニュの場合、自己の責任において、または、自己の自由においてまかせるといふ意味である。それでなければモンテー

ニユの自己は消えて無くなる。自然は、われわれに何も語らない。自然の言葉を聴くのは、われわれ自身だからである。そして、自然に従ふことなしには、自然の言葉は聴かれないのである。それは、眠りつゝ目醒め、逆らはずに抵抗し、流されつゝ目標を見失はぬ困難と曖昧さを持つてゐる。何よりもまづ眞實を追求し、眞實とのみ妥協しないモンテーニユの明瞭さにもかゝらず、モンテーニユの思想の全體が與へる印象が曖昧である理由は、こゝにあると思ふ。しかし、眞實とは、また、眞の思想とはそのやうなものであると、モンテーニユは言ふであらう。また、それが本當に生きることであつて、曖昧に生きることではない、と言ふであらう。

「人は、もし眞に享受せんと欲するならば、それを眞に享受しなければならぬ」そして、かゝる誠實と勇氣を缺く人間にたいしては、「美しい魂に觸れ、これを満す如何なる果實をも期待することができない」(三、三)と彼は言つてゐる。また、人間の狂氣が、人々の信ずるほどには、人間の本性にもとらぬことをも知つてゐる。「学者達は、彼らの諸々の思想を、類別的に、甚だ詳細に、分類し記録する」が、われわれの魂のごとく「混合した、微妙な、定めのないものについて、その限らない相貌の多様性を整へ並べることができらうか、吾々の無常に停止を與へ、秩序立てることができらうか、私は、吾々の行爲を相互に結び合せることが困難であると思ふばかりでなく、それらの行爲の一つを離して、これを何らかの主要な特性として示すことさへ困難であると思ふ。」(三、十三)

モンテーニユはこのやうな奇怪な人間性の一例として、「彼自身にも他人にも、彼がどんな人間であるか解らなかつたほど、奔放自在な行爲を示した」マケドニヤ王ペルセウスを擧げてゐるが、おそらく、彼は近代文学の、たとへば、ドストイエフスキーの作品のどんな人物にも驚きはしないだらう。しかるに、モンテーニユは他方、われわれのパソコンにともなふ苦痛と快樂の裡に、自然が教へる微妙な教訓を鋭くとらへてゐる。

「苦痛も、その慎ましい初期には、何か避けがたいものを持つてゐる。快樂も、その究極においては、何か避けな

なければならないものを持つてゐる。」

こんなふうに、例外の眞實を承認しながら、モンテーニユ自身は、精神と肉體の衛生地帯を歩いてゆく。そしてこのコースは、彼の前方には見えないもので、無軌道車が進む道のやうに、たゞ自己の判断と選擇によつてのみ拓かれてゆくものである。しかもそれは、世界と自己の變轉動搖のなかで行はなければならぬ。モンテーニユが一個の卓抜した精神であることは、この困難を彼が知つてゐることである。

「端に沿つて歩くのは、その端が縁となり、止まることも進むことも教へてくれる故、廣い、何もない道の眞中を歩くよりは、ずつと容易である。そして、學術に従つて歩くことは、自然に従ふよりも易しい。それだけに、尊くもなく、推稱すべきものでもない。」(三、十三)

中道とは、このやうなものである。指示され、豫定された中道といふものは存在しないのである。それは、訴訟と辯護、狂氣と理性、崇高と凡庸、生と死、それらのいづれをも排除しない思想の便利と自由が、その代償として受取る困難である。この不安な安定だけが、モンテーニユに残された絶對である。

かくして、「エセエ」は、抽象から現實へ、推理から事實へと移つてゆくやうに見える。しかし、モンテーニユがわれわれに示す現實は、彼の書齋や食事や、膀胱結石や、わづかな身邊の出來事に止まつてゐる。われわれが親んでゐる日本的なエセエは、むしろこれらの事實が主賓となり、判断の主人は慎しやかに控へるのであるが、モンテーニユの場合、事實はつねに、判断の奉仕者たる地位に止まつてゐる。彼はたゞ、判断が事實に先行しないやうに、絶えず、聰明な目を開いてゐる。

「エセエ」の最後の章に、こんなふうに書いてゐる。

「私は踊る時には踊る。眠る時には眠る。だから、私が獨りしづかに、美しい果樹園のなかを散歩する時にも、私

の思想はある時間、何か別の事にかゝりを持つことがある。しかし、他の時間には、私は私の思想を、散歩に、果樹園に、孤獨の寂けさに、私自身に引きもどす。

自然は、慈母の如く、彼女が吾々の必要に應じて興へた行爲が愉しいものであることを認容してゐるのだ。そして吾々を、理性のみよらず、慾望によつて愉しむやうに招いてゐる。かういふ自然の掟を損ふのは、不正である。」